論　文

ソール・ベロー『サムラー氏の惑星』論

神戸春樹

A Study of Saul Bellow's *Mr. Sammler's Planet*

Kobe Haruki

Abstract

Apollo 11 landed on the moon on July 20, 1969, which was a monumental event in the twentieth century. All people in the world were talking about the moon and the other planets. In1970 Saul Bellow, one of the greatest American writers, showed a significant reaction to it and published *Mr. Sammler's Planet*.

This novel is considered a history and a prophecy, and called a nonfiction philosophical novel. The themes of this work are the madness of man and the corruption of our civilization. I'd like to concentrate on these themes and examine the significance of this work.

Mr. Sammler, the main character, having survived being buried alive in a Nazi concentration camp in Poland during World War Ⅱ, is living in New York. He suffered from the historical tragedies in Europe and now is exposed to the crime and violence in New York. He recognizes the importance of the balance of religion and science. Furthermore, he is awakened to religious mind learned from Eckhart.

1.

20世紀が終わりを告げた。そして，20世紀とは何であったか，という議論がかまびすしい。この20世紀の100年のあいだには，実にさまざまな歴史的モニュメントが厳存している。そのなかでも，忘れることのできないものの一つに，1969年7月20日のアポロ11号の月面着陸がある。

1961年，ジョン・F・ケネディは，60年代が終わらぬうちに，人類を月面に着陸させるというアポロ宇宙計画を発表した。しかし，その後の60年代は，黒人の人権闘争やヴィエトナム戦争の激化により，混迷を深めていった。こうした状況のなかで，アポロ計画は，為政者の失政を糊塗し，国民意識を鼓舞する手段として，利用されていった感がある。一方で，アポロ計画

は，資本主義産業体制とアメリカン・テクノロジーのシンボルであった。しかし，この壮大な計画実現のため，多岐にわたる社会的・歴史的進歩が犠牲にされ，世界規模の悲苦が看過されていった事実も否定できない。

ケネディのアポロ宣言の6週間後に，アーネスト・ヘミングウェイが自殺し，翌1962年には，マリリン・モンローが謎の死を遂げた。これらの事件は，来たる60年代に，不吉で不気味な陰を投げかけていたと言えよう。

1969年のアポロ11号の月面着陸の折りには，そのテレビ中継に，世界中の人間の目が釘づけにされた。またそれ以後，その歴史的意義や功罪も，さまざまに議論されてきたと言えよう。しかし，この人類の歴史的事件に，アメリカの現代文学を代表する二人の作家が，それぞれに意義深い反応を示したことは，特筆されるべきことであった。その二人とは，第2次世界大戦後のアメリカ文学の双璧とも言えるノーマン・メイラー（Norman Mailer, 1923-　）とソール・ベロー（Saul Bellow, 1915-　）である。

ノーマン・メイラーは，その1969年中頃，作家のアンガジュマンを実践すべく，ニューヨーク市長選挙に民主党から立候補し，その意を果たせず落選していた。その2週間後，彼はケープ・ケネディに赴き，その歴史的ドラマを精力的に取材し，それを一冊の本にまとめた。それが，『月にともる火』（*Of a Fire on the Moon*, 1970）である。ハーバード大学で宇宙工学を専攻していたメイラーは，この取材に最も適任といえる作家であった。彼は，アポロ11号の構造，月面の地勢，重力や機械について精密にレポートし，さらには人間メイラーの意識を克明に綴っている。しかし結局，彼は，この宇宙計画に熱狂する人間の姿に懐疑の念を覚え，テクノロジー優先の時代には批判的であった。

一方，ソール・ベローは，この宇宙時代を背景とする哲学的な長編小説『サムラー氏の惑星』（*Mr. Sammler's Planet*）を執筆し，翌1970年にこれを出版した。この作品は，ナチの収容所から奇跡的に生還し，ほぼ20世紀全体を生きてきた70歳代の男の目を通して，ニューヨークの現代文明を描くという極めて歴史的で哲学的な作品であった。この作品は，長い構想と推敲のもとに，ようやく1969年の後半に完成に近づいていったが，その最初に予定されていた作品のタイトルは，「月の未来」（"The Future of the Moon"）というものであった[1)]。

メイラーとベローという当代を代表する二人の作家が，アポロ11号の宇宙計画に逸早く反応し，月面着陸の翌1970年には，それぞれ優れた文学作品を出版していることは，当時のアメリカ文壇がいかに充実していたかということの証左ともなっている。しかも，メイラーはノンフィクションという形で，他方ベローは哲学的長編小説という形で，20世紀やテクノロジー文明を主題とするスケールの大きい思想的作品を生み出しているのである。余談だが，この年，メイラーは，ノーベル文学賞の最右翼候補と目されていたが，結局サミュエル・ベケットが受賞した。一方ベローは，その後まもなく，1976年にノーベル文学賞を受賞することになる。

2.

前述した通り，当代を代表する二人の作家が，アポロ11号の月面着陸という歴史的モニュメ

ントに立ち会い，それぞれ優れた作品を生み出した。我々は，これらの作品によって，アポロ11号の歴史的意義について，さまざまな示唆をあたえられるのである。本稿では，前述したベローの『サムラー氏の惑星』を取り上げ，この作品について論じてみたい。

ベローの作品は，その初期から，一貫して思想的色彩の濃いものばかりである。しかし，『サムラー氏の惑星』は，作者自身語っているように，逡巡もてらいもなく，思想的なものを正面から追求した作品であった[2)]。したがって，この作品は，「ノンフィクション・哲学小説」と呼ばれることになった[3)]。しかも，作品の中軸は，主としてその主人公のモノローグからなっている。これまでのベローの作品は，思想的色彩が強くても，きわめてリアルな現実描写がそれを背後からしっかり支え，作者の見事な語りも相俟って，説得力のある作品世界を構築していたのだが，この作品では作者の思索がかなり剥き出しのまま語られていくのである。

一方で，ベローは，アメリカのマス・メディアが文学におよぼす影響について，警告を発している。すでに20世紀の初め頃から，文学者は，大衆文化やジャーナリズムからの，作家自身や言語の浄化の必要性を，ずっと意識してきた。さらに現代では，作家は，『タイム』や『ニューズウィーク』等の新しいマス・メディアの問題に直面している。現代のパターン化し，洗練されたメディアの影響は，看過できないものなのである。芸術は，意識の浄化という重要な役割を担っている，とベローは考えている。『サムラー氏の惑星』の発表当時，ベローは，こうした発言を繰り返している[4)]。したがって，この作品の独自な主題や表現の奥には，ベローのこうした文学観が内在していたと考えられるのである。

『サムラー氏の惑星』までのソール・ベローの長編小説を振り返って見ると，一つの事実に気がつく。それは，彼の作品の主人公が，作者と同時に齢を重ねていくということである。すなわち，それぞれの作品の主人公が，執筆時の作者とほぼ同年齢になっているのである。したがって，彼の作品世界は，作者ベローの経験や成長と歩調をあわせ，広がり，深まっていっている。また，こうした点で，彼の作品は，想像力豊かでありながら，自伝的であると指摘されるのである。

しかし，『サムラー氏の惑星』の主人公は，執筆時の作者ベローより，20歳位年上として，設定されている。その意味でも，この作品は，明らかに，これまでの作品とは異質なものとなっている。さらに，この作品は，トインビーやシュペングラーを視野に入れた現代文明論となっており，主人公にはきわめて複雑な条件が賦与されている。まず，サムラーという名前は，ドイツ語で，「蒐集家」とか「蓄電池」という意味を持っている[5)]。その名前が，主人公の独自で象徴的な設定を表わしているのである。サムラーは，ヨーロッパの教養を身につけた知識人で，ナチの収容所の虐殺から奇跡的に蘇生したユダヤ人であり，現在は混沌たるニューヨークに居住して現代を目撃している人物である。彼は，その経験と博識によって，空間的にも時間的にも，人類の歴史を視野に置きつつ世界を渉猟し，異国人の目から，アメリカの状況を蒐集し模索しているのである。また，「蓄電池」という意味は，彼が現在もっとも信頼を寄せている，13世紀の思想家マイスター・エックハルト（Meister Eckhart）の「魂のうちにある火花」を表わしていると考えることもできよう[6)]。また彼は，周囲の人々にとっては，サムラー伯父（Uncle Sammler）であるが，サム伯父（Uncle Sam）とは，アメリカの別称でもあるのだ。さ

らに，「サムラー氏の惑星」とは，いうまでもなく彼の住むこの地球のことにほかならない。

サムラーは，1940年ポーランドのナチの強制収容所で，自分たちの墓穴を掘らされたあと，妻とともに銃火を浴びせられ，そこに倒れ込んだ。しかし，彼だけが九死に一生を得て，逃亡に成功したのだ。その後，戦争が終わるまでの３，４カ月間，大きな墓所に身を潜めていたが，彼は死人のような生活をしていた。彼が生物的な意味での人間らしさを回復したのは，戦後10年かそこら経ってからだった。このような人類の狂気を体験した彼は，それから30年の歳月を経て，現在ニューヨークで，荒地と化した文明の頽廃を目撃する。しかし今でも，地下鉄に降りていくことは一種の試練で，墓地や死や埋葬のイメージを伴うのである。彼の立場は，文明の頽廃を詠ったＴ・Ｓ・エリオットに近いと言えよう。その意味で，サムラーは，Ｔ・Ｓ・エリオットの詩「プルーフロックの恋歌」において，すべてを語るため死から蘇った主人公であり，そこに言及されているラザロ（イエスの奇跡によって死から蘇った人物）である[7]。サムラーの象徴的立場は，作品のなかの次のような説明にも明らかにされている。

> It was the Sammlers who kept on vainly trying to perform some kind of symbolic task. The main result of which was unrest, exposure to trouble. Mr. Sammler had a symbolic character. He, personally, was a symbol. His friends and family had made him a judge and a priest. And of what was he a symbol? He didn't even know. (p.91) [8]

また，サムラーは，収容所で銃火を浴びる前に，銃の台尻で殴られ，左目を失明していた。この設定は，ギリシャ伝説のテイレシアスと結びつけられている。テイレシアスは，テーベの予言者であったが，入浴中のアテーネーの姿を見たため，盲目にされてしまう。だがのちに，アテーネーの怒りが解け，予言の力を授けられたという人物である。サムラーには，この盲目の予言者のイメージが賦与されているようである[9]。さらに，彼の左目は，光と影をぼんやりと認識することしかできず，それはもっぱら自己の内面を観照することになり，深い省察に向かうことになる。一方，正常な右目は，その感覚が尋常より研ぎ澄まされ，人間の狂気と文明の頽廃を鋭敏に映しとることになる。したがって，彼の両目は，さまざまな二重性を帯びていると解釈することができる。また，サムラーは，いつも薄ずみ色の眼鏡を掛けているが，それは，自分の視力を保護するためだけでなく，自分のこの不可思議な両目のことを知られないためなのである[10]。

サムラーの人間像は，このように哲学的小説の主人公らしく，きわめて象徴的に描き込まれているが，作者ベローの頭には，そのモデルとなるイメージがあったようである。あるインタビューのなかで，ベローは，このモデルとなった人物について語っている。それによれば，これは，ベローがパリで出会った人物で，ロシア系かつイタリア系の老人であった。その人物は，戦争中は，パリに身を潜めていた。彼の容姿，歩き方，それに目が不自由である点などは，サムラーに受け継がれているようである[11]。ベローは，こうしたイメージを醸成させつつ，しかもきわめて象徴的な人物を造形していったのである。

3.

この作品は，主人公サムラーの三日間の生活を描いている。しかし，すでに触れてきたように，第2次世界大戦のナチ収容所の死から蘇った主人公の，20世紀全般にわたる人生がその背景にあり，現代文明の中心地ニューヨークが舞台で，折りしもアポロ11号の宇宙計画が人類の最大の関心事となっている。これは，70歳代の現代の予言者の，文明論であり，歴史観なのである。彼は，現代のニューヨークをソドムとゴモラとみなしている。また，作者ベローは，現代文明は奈落の上に張った長いロープの上に立っている，と考えている。破滅的で解決しがたい問題があまりにも多すぎるというのである[12)]。

ベローは，その原因の一つが，ミメシス尊重の伝統の失われたことにある，と考えている。とくに，ロマン主義が，個性や独創性を強調するあまり，こうした混迷を招いたのではないかというのである[13)]。すなわち，現代人は，独創性の熱病に罹っているのである。また，福祉社会が広がっていったが，一方であまねく権力や富を求めることが，人類の共通の目標となり，面白い生活が至高の概念となってしまった。こうした意味で，ベローは，歴史的な進歩主義の概念にも懐疑の念をいだくのである。

サムラーは，現代ニューヨークの文明の頽廃に，さまざまな人間の狂気を目撃することになる。そのニューヨークは，暴力と犯罪と性が支配する世界と成り果てている。それは，彼を取り巻くさまざまな人間を通して描かれる。まず，サムラーが数日間バスでその犯罪を目撃する黒人のスリが，とりわけ象徴的な役割を果たしている。このスリはハンサムで，アフリカのプリンスとも，大きな黒い野獣ともいえる姿をしている。すなわち，ニューヨークというジャングルの支配者なのである。このスリは，ベローが高校時代の友人から聞いた話が素材となっているようである。この友人は，ブロードウェイのトロリーバスでスリの犯行を目撃したが，どうしていいか分からなかったという[14)]。しかし，このスリの描写は，きわめて象徴的な面を備えている。すなわち，ルネッサンス以降の重要な思想が，彼という人間を形成しているのである。まず，彼は，動物的イメージ，適者生存，人間の退行によって説明され，ダーウィンの思想を表わしている。また，クリスチャン・ディオールの黒っぽい色眼鏡を掛け，フランスの香水の香りを漂わせているところは，ルソーを示している。ラクダ織の上着とホンブルグ帽は，ニーチェを想起させる。さらに，彼が，サムラーを追いつめて，自分の股間を見せる姿は，明らかにフロイトを体現しているといえよう。こうした姿は，宗教的精神を放擲したルネッサンス以降の文化の行き着いた先が，このニューヨークであり，狂気と頽廃だったということを暗示しているのである。

この作品の前半におけるもう一つの大きな事件は，コロンビア大学におけるサムラーの講演とその混乱である。以前のことだが，目の不自由なサムラーのために，娘のシューラが本の朗読役に大学生を雇ってくれていた。その一人で，いまは大学院生のライオネル・フェファーが，1930年代のイギリスの状況について，コロンビア大学で講演をしてくれと頼んできたのだ。フェファーは敏腕な策士で，外交史の学者というより興業主で，精力家であった。いろいろな計

画やざったな話で人を混乱させるのである。せかせかして，おせっかいで，厚かましく，激情的で，企業心がある。大学で専門を持ちながら，株式市場に金を注ぎこんでいる。女たらしで，その対象は人妻である。彼は，無政府状態や崩壊状態に陥りそうなほど，高度に精力的なアメリカ生活を送っていた。彼は，文明の混迷を招いているアメリカの知識人の典型といえよう。このライオネル・フェファー（Lionel Feffer）は，評論家レズリー・フィードラー（Leslie Fiedler）のタイプの知識人をモデルにしているようである。名前のイニシャルが一致していることに注目したい。ベローは，フィードラーがマス・メディアの御用商人の役割を務めているとみなしているのである[15)]。

コロンビア大学で行なわれたサムラーの講演は，罵声と怒号のうちに中断された。サムラーは，学生たちの侮辱しようとする意志に打ちのめされる。何という混乱した性的＝排泄物的＝戦闘心，罵詈雑言癖，歯の剥き出し，サルの咆哮か。この講演会も，人間の狂気や文明の頽廃を表わす現象の一例となっている。これについては，サンフランシスコ州立大学でベローが体験したことが，素材として用いられているようである[16)]。この場面ばかりでなく，この作品に描かれる現代社会は，まさにドストエフスキーの『悪霊』の世界そのものである。この作品に登場する人物たちは，ネチャーエフをモデルにしたピョートル・ヴェルホーヴェンスキーばかりといえよう。

さらに，現代人の狂気と堕落を表わす人物として，サムラーの身近にいる人々が描き込まれている。物静かで寛大な聞き手である老人サムラーに，これらの人々は次々に厄介な話を持ち込んでくる。親戚にあたるウォルター・ブルッフ（Walter Bruch）もその一人だ。彼は，合唱隊や聖歌隊のバリトン歌手であり，音楽学者である。彼の悩みは性的な問題で，女の丸々とした腕に異常な反応を示してしまう。彼は強制収容所で辛酸を舐め，60歳を越えているのだが，人生経験を通して成長することができない人間の典型である。そして，いまでも自分の部屋でおもちゃ遊びをしている。そんなことをサムラーに打ち明けては，子供のようにさめざめと泣くのである。

また，サムラーの甥イーリヤの娘アンジェラ（Angela）がいる。彼女は，現代の解放された女性のカリカチュアである。美人で，金持ちで，自由で，洗練されてはいるが，本質的には淫猥な娼婦である。ユダヤ人の頭脳，黒人の男のシンボル，北欧人の美貌が，女の求めているものだと，彼女は無遠慮に言い放つ。彼女も，現代の性的狂気に陥っているのである。最後の場面で，死の床にある彼女の父親に愛情を示してやったらどうか，と言うサムラーを彼女は罵倒する。それは，コロンビア大学の講演会の過激な学生たちと同じ姿である。現代のマグダラのマリヤは悔い改めることはなく，したがって許されることはないのである。

アンジェラの弟ウォレス（Wallace）は，20歳代の後半なのに，夢想と幻想から抜けきれない少年である。父親の成功の恩恵に浴しながら，その父親の成功に反抗する。歴史上，裕福な一族が，無政府主義的な息子を，定期的に世に送り出してきたのである。ウォレスは才能にも恵まれた青年だったが，物理学者のなりそこない，数学者のなりそこない，弁護士のなりそこない，エンジニアのなりそこない，アルコール中毒のなりそこない，ホモのなりそこないであった。彼は，現代の放蕩息子（the prodigal son）であり，戦後の恐るべき子供（the *enfant*

terrible）なのである。

また，サムラーはいま，姪のマーゴット（Margotte）と同居し，その世話になっている。彼女は，親切ではあったが，論理的にはずさんだった。善良ではあったが，他人の時間や考えに，がさつに割り込んでくる女性だった。また，つまらないお喋りをし，ガラクタを集めてくる。サムラーのこうした辛辣な批判は，アルチュール・ショーペンハウアー（Arthur Schopenhauer）の女性観からきているとの指摘もある[17]。

最後に，サムラーの娘，シューラ（Shula）について検討してみたい。彼女も，上記の人物たちと同類の女性のように見える。彼女は，ガラクタ集めと乱雑さでは，マーゴットよりずっと酷いのである。まるで街路掃除人のようで，ブロードウェイでごみ籠あさりまでやっている。こうした彼女の姿も，現代人の日常生活の象徴的な相を表象している。また彼女は，カトリックに改宗した時期もあり，そういう意味でも，落ち着きがなく無責任な人間とみなされよう。こうした姿から，彼女は，放蕩息子のウォレス，フェファーや講演会の学生たちと同じタイプに見える。さらに，彼女の結婚生活では，日常的にも性的にも，夫がサディスト，彼女がマゾヒストの役を演じていたことが暗示されている。こうした面では，彼女は，ブルッフやアンジェラと同じ性的狂気状態を体験している。最後に，彼女は，父親のためとはいえ，『月の未来』という論文を盗んでくる。これは，彼女が，黒人スリと同じようなレベルのモラルの持ち主であることを示している。このような点から見ると，彼女も現代人の狂気や堕落を代表しているように思われる。

しかし，シューラの場合は，それほど単純ではなく，複雑で微妙な性格を備えており，綿密に捉えていく必要がある。彼女は，幼い頃から虚弱体質で，狂気じみたところがあった。これは彼女が悪いわけではなく，むしろそうした体質を授けた親のサムラー夫妻の責任であろう。そのことは，サムラー自身も自覚しているところである。第 2 次大戦の頃の激動の時代には，シューラは，修道院に預けられ，辛うじて生きながらえた。サムラーが修道院に娘を引きとりにいったとき，彼女は14歳になっていたのである。その後，狂気を潜ませている男と結婚し，そこから逃げ出してくる。それからはしばらくニューヨークにおいて，親子で同居していたのだが，サムラーが変わり者のシューラとの同居に耐えられず，いまは別居している。40歳を過ぎて，彼女は買い物袋を携え，一人でニューヨークの街をうろついている。こうして見てくると，彼女の境遇と運命にも，大いに同情の余地のあることが分かる。そして，サムラーは，じつはこの娘をこよなく愛していたのだ。血肉を分けたたった一人の子供として，心から慈しんでいたのだ。第 6 章の初めで，結婚問題についての親子の対話が描かれている。サムラーは，シューラに今後は間違いを起こさないようにと忠告する。子供を失敗から守ることは，親としての義務だからと言う。このあとで，シューラは，お父さんが自分に関心を持っていることを知って，ずっと気持ちがよくなってきたと語っている。この場面では，二人の愛情が通い合ってきた兆しを，感じさせられるのである。

さらに，最後の場面で，イーリヤの娘アンジェラに絶対的拒絶を突きつけられたあとで，サムラーは，シューラが見つけたお金について，彼女と電話で話し合っている。そのとき，彼女を「犠牲」にしても，サムラーが自分の頑固さと馬鹿正直を通そうとすることに，シューラが

憤慨していることを彼は感じ取っている。ある意味で，この場面は，これまでの二人の関係を象徴している。娘のシューラの人生を犠牲にしてきたところもあり，サムラーは，決して良い父親だったとは言えないのではないか。娘のシューラの現在の状況は，父親であるサムラーにかなりの責任があるのだ。この場面で，シューラは，身なりを整えれば，自分だって変わり者には見えず，誰かとのチャンスが生まれるかもしれないと言う。また，これまでも自分の収入の範囲内で，自分なりに魅力的な人間になろうと努力してきたと告白する。このシューラの言葉を聞いて，サムラーは，彼女が自分というものを自覚していたこと，またなにがしかの趣味を働かせていたことを知らされるのである。この会話の最後のサムラーの言葉「きみは，良い娘だよ。この上なく良い娘だ。これ以上の娘はどこにもいないよ」（“You're a good daughter. The best of any. No better any.”）（p.311）は，シューラにたいする彼の愛情と，新たな認識を暗示している。シューラは，サムラーの周辺の狂気に満ちた人物たちと同類に括られるように見えるが，アンジェラとは対照的に，救いの可能性が残された人物として描かれているように思われる。

4．

ソール・ベローのこの作品は，文明論であり，歴史書であり，さらに予言書となっている。したがって，作者の該博な知識が，作品の隅々に凝縮され，網羅されている。その意味で，ニューヨークや第2次大戦中における主人公サムラーの体験が，この作品の中心をなしてはいるが，この大戦前の彼の生活も重要な役割を果たしている。彼はポーランドに住むユダヤ人であったが，1920年代と1930年代には，ジャーナリストとして，イギリスに滞在していた。ブルームズベリに住み，ロンドンやオックスフォードの知識人と交友を結んでいた。とくに，当時もっとも影響力があったH・G・ウェルズにも評価され，ジェラルド・ハードやオラフ・ステーブルドンの理想的な「国際都市」の計画に参加していたのである。イギリス紳士でもあった彼は，現在ニューヨークでも，イギリス流に巻いたこうもり傘をいつも手にしているのである。「国際都市」の計画は，次のような理想に基づくものだった。生物学，歴史学，社会学といった科学の普及，人間生活への科学的原理の効果的適用，計画的で秩序だった美しい国際社会の建設，すべての人に無料で教育を提供すること，（社会福祉と両立することを条件とする）最大限の個人の自由，生活にたいする合理的で科学的な態度に基づく福祉社会等々。しかし，こうした合理的で科学的な理想が，皮肉にもナチや第2次大戦を生み出したとも言えるのである。少なくとも，こうした理想は，その後の歴史的悲劇にまったく無力であり，なすすべもなかったのである。また，現代のニューヨークで，スリを目撃したサムラーが警察に連絡しようとしても，どの公衆電話も故障していた。やっと警察と連絡がとれても，そんな瑣末なことに関わることはできない，と冷たい答が返ってくる。電話と警察は，人類の進歩のために作られた「科学と法」を具現する社会制度の象徴である。こうしたことから，サムラーはいまや国際都市の理想に関心を持てなくなっているのである。彼が，H・G・ウェルズの回想録を書こうと志しながら，完成できないのは，そのためなのである。そして，彼がいまエックハルトや聖書にしか関

心を持てなくなっているのは，イギリスの合理的で科学的なユートピア思想よりも，宗教的精神に傾斜してきているからにほかならない。

さらに，本論の第3節で記したように，人間の狂気と文明の頽廃を生み出した原因が，スリの姿に投影されている。それは，ルネッサンス以降の重要な思想を代表するダーウィン，ルソー，ニーチェ，フロイトである。サムラーは，ルネッサンスが宗教的な精神や直感を放棄し，人間主義と合理主義に向かったことが，人類の現状を招いたと考えるのである。彼は，13世紀のエックハルトなどの宗教的作家にしか，興味をいだけなくなっていったが，それは，13世紀が中世とルネッサンスの狭間にあり，宗教と科学の調和がとれていた時代だったからであろう。サムラーによれば，この宗教的精神と科学的精神の調和こそ，人類にとって最大の命題なのである。

第5章では，インド人の生物物理学者ゴヴィンダ・ラル（Govinda Lal）とサムラーとの対話が描かれる。ここでは，さまざまな問題が話し合われるが，その中心は，人類の宇宙計画と植民の問題である。ラルは，『月の未来』という論文を書いていた。これは，この地球が人類の唯一の住処のままでいられるだろうか，ということを科学者の立場から論じたものである。そして彼は，宇宙への遠征と植民を主張することになる。この意味で，ラルは，前述したH・G・ウェルズや国際都市の理想につながる人物である。彼は，宇宙遠征は，人間の根源的意志と，人類の進歩の必然的結果であると説く。また，インドの人口過剰を例にして，この惑星は牢獄化してしまい，一つだけの惑星ではもうどうにもならなくなっている。さらに，こうした自己実現の可能性を達成しなければ，我々はいままで以上に人生に苛立つことになるだろう，と彼は語る。

こうしたラルの意見を拝聴してから，サムラーは人間の義務について語り，さらに現代人の独創性の熱病などについて論じたあと，宇宙計画についての自分の考えを披瀝する。工学上の計画としての宇宙への植民は，好奇心や創意ということを除けば，自分にとって本当に興味あるものではない。一方で，こうした遠征を組織しようとする意志は，人間的な運命として理解できる。しかし，まずこの我々の惑星に正義を築くこと，また聖人の地球を実現することが必要である。月への遠征は，そのあとで考えることであると，サムラーは説く。ここでサムラーが述べているのは，本節で検証してきた彼の文明論や歴史観に基づくものである。ラルの主張を受け入れながらも，それが，H・G・ウェルズや国際都市の理想の場合と同じく，科学や合理性を偏重し宗教的精神を喪失しており，ロマン主義的な独創への幻想に陥っていると感じるのである。さて，このサムラーとラルの対話は，放蕩息子ウォレスが引き起こした「洪水」によって突然幕を降ろす。ウォレスは，父の隠し金を探していて，水道管を故障させたのである。この場面も，きわめて象徴的と言わざるをえない。科学技術が生み出した水道施設が，宗教的な精神や直感を失った放蕩息子によって破壊され，ノアの洪水を招来させたのである。サムラーとラルの対話のあとで起こったこの事件は，サムラーのこの惑星・地球にたいする予言となっている。それは，ラルとアメリカの唱える宇宙計画が，必然的な帰結として，この地球にノアの洪水をもたらすであろう，という予言なのである。こうしたサムラーの認識と予言は，アポロ宇宙計画にたいする作者ベローの見解を，代弁するものと考えてよいだろう。

死に瀕しているイーリヤ・グルーナーに会うため，病院に向かうサムラーは，フェファーと黒人スリが争っている場面に遭遇する。スリの暴力から，フェファーを救おうとして，彼は見物している群集に助けを求めようとするが，そのなかに異様な雰囲気を感じ取る。それは，暴力と殺人の現場に居合わせたという，彼らの顔に浮かんでいる不気味な恍惚感であった。サムラーは，その虚無の深さにおののき，自分の無力さを痛感する。結局，彼は，その場に居合わせた娘婿でサディストのアイゼン（Isen：ドイツ語で「鉄」を意味する）[18] に，仲裁を頼む羽目になる。鋳造工場の工員であるアイゼンは，自分の作ったメダリオンの入った袋で，その黒人を滅多打ちにする。思わず止めに入るサムラーに，アイゼンはこう言い放つ。「こういう男は，一度だけ引っぱたくという訳にはいかないんです。引っぱたくんなら，本気でやらなきゃ。そうでなきゃ，こっちがやられちまうんですよ。」（“You can’t hit a man like this just once. When you hit him you must really hit him. Otherwise he’ll kill you.”）（p.291）アイゼンの論理と合理性に，サムラーの心は滅入ってしまう。こうしたものが，ヒトラーやナチのホロコースト（大虐殺）の論理ではなかったか。また一方で，困難な局面に直面すると，人間は無謀にも，こうした独裁や暴力に頼ろうとしてしまうのだ。この場面もまた，過去の歴史の縮図であり，かつ未来を予言しているのである。こうした復讎の論理は，人間の複雑さや不可解さを看過し，単純性と合理性によって，狂信的な方向へ猛進してしまう。ここでも，科学的イデオロギーを万能薬として盲信し，宗教的直感を拒絶した人類の末路が暗示されているのである。さらに，この場面は，サムラーの第 2 次大戦中の殺人ともつながっている。彼は，武装解除させたドイツ兵の命乞いの言葉を無視して，銃殺したのだ。しかも，2 発も撃ちこんだ。彼が 2 発目を撃ったのは，その至福感をもう一度味わおうとしてのことだった。「当時の彼には，神はいなかった。長年のあいだ，内心では，自分以外に裁くものはいないと思っていたのだ。」（“At that time, he did not (have any God). For many years, in his own mind, there was no judge but himself.”〔括弧は筆者〕）（p.141）アイゼンの行為は，サムラー自身体験したことであったのだ。この作品は，サムラーの「罪と罰」の物語でもあり，ラスコーリニコフの場合と同じ，罪の合理的正当化の問題がその背景にある。そしてまた，神を喪失したラザロとテイレシアスの復活の物語でもあるのだ。

第 6 章の最後の場面で，ようやくサムラーはイーリヤ（Ilya）の病院にたどりつく。しかし，結局イーリヤの臨終に立ち会うことはできない。戦後彼を救い出し，その後も生活の面倒をみてくれたのは，この甥のイーリヤであった。イーリヤは，やもめの外科医兼実業家で，シューラとウォレスの父親である。欠点もあり，良い父親でもなく，いかがわしいことにも手を出していることが暗示されているが，自分の義務を果たし，人間的な生き方をしてきた。人間的であるということ，また人間的な責任を果たすということが，現代ではいかに慎ましく，いかに困難なことかが，このイーリヤを通して描かれている。また，文学においては，善人を描くことに偏見のようなものがあり，それを描くことは至難である，と作者ベローは考えている。ドストエフスキーでさえ，ムイシュキン公爵とアリョーシャしか創造できなかったのである[19]。サムラーは，イーリヤについて次のように説明していく。イーリヤは，善人が自分よりも前にいたし，今後も生まれてくると知っていて，自分もその一人になりたいと望んでいたと。また

サムラーは，我々弱い人類は不安と闘い，我々狂った人類は犯罪性と闘ってきたのだ，とも語っている。

サムラーは，この愛する甥の死に臨んで，できるだけのことを尽くし，できるだけのことを言ってやりたいと考えていた。イーリヤの二人の子供たちにはそれを委ねることはできず，彼の現世の実業もいまとなっては本人に何の力にもならないことを知っていたからだ。それで，暗黙のうちであれ，何らかの合図をイーリヤに送ってやりたいと思う。それは，次のようなものである。我々は，おたがいに思っているほど現実的な存在ではなく，みんな死んでいく。「それでも，絆というものはある，絆があるのだよ」（“Nevertheless there is a bond. There is a bond”）（p.261）というものである。孤独のうちに死んでいくイーリヤに，この言葉を告げてやりたかったのだ。

サムラーのファースト・ネームは，アーター（Artur）といい，アルチュール・ショーペンハウアーのもの（Arthur）と同系のものである。彼が目指していく境地は，ショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』第 4 巻で語られている意志の否定，性格の廃棄，普遍的で超越的な変化，あるいは再生と呼ばれるものであろう[20]。一方で，意志なるもの，世界の内奥の創造的な力，生殖器官にかりたてられているのは，黒人スリやフェファー，アンジェラやウォレス，それにナチであろう。

さらに，民族の故郷である中東の悲惨な戦争を目撃してから，サムラーの関心は，もっぱらエックハルトに移っていった。エックハルトも，離脱，意志の否定という点で， ショーペンハウアー に通じる面を持った宗教家である。エックハルトの思想は，ベローのこの作品にも収録されているが，その思想が，サムラー において実現するかたちをとっている。前述した黒人スリとフェファーの争いの場面で，サムラーは，自分の「心貧しき」（“poor in spirit”）（p.290）姿を認識する。これはもちろん，『マタイ伝』第 5 章第 3 節の「心貧しき者は幸いである」に通じるものである。しかし，それはまた，エックハルトの次の言葉に，つながるものなのである。

> “Blessed are the poor in spirit. Poor is he who has nothing. He who is poor in spirit is receptive of all spirit. Now God is the Spirit of spirits. The fruit of the spirit is love, joy, and peace.”(p.253)

ようやくたどりついた病院で，サムラーはイーリヤの死を知らされ，彼の遺体と対面することになる。意味深いことに，サムラーは，いつも掛けている薄ずみ色の眼鏡を，ここで初めて外す。そして，その遺体の安置されている部屋に向かうとき，次のような感慨をいだく。

> Well, Elya was gone. He (Sammler) was deprived of one more thing, stripped of one more creature. One more reason to live trickled out. (p.312)

ここで，サムラーは，また生きる理由を奪いとられ，剥ぎとられたという深い喪失感を味わ

っている。これもまた，先の「心貧しき者」についてのエックハルトの引用の，すぐあとにくる言葉の実現である。それによれば，人間に関するいっさいのものを剥ぎとらなければ，神に近づくことはできないのである。人間から慰めを得ているようでは，神の真の慰めを認識することはできない。神のみに慰めを得ようとするとき，神はまことに慰めを与えて下さるのである。(p.253)「あなたが望めば，一切の事物も神も，あなたのものとなる。あなた自身と一切の事物とを，あなた自身のもとにあるあなたの一切を，捨て去りなさい。」[21] 神は無私な純粋さと統一を愛しておられ，無私な魂に魅かれておられるのである。(pp. 117-18) まさしくサムラーは，こうした言葉の実現へと向かい，深い宗教的精神を成就しつつあるのである。

ようやくイーリヤに対面したときのサムラーの心境は，このようなものだった。彼には，あらかじめ，寂しく死んでいくイーリヤに告げようとしていた言葉があった。それは，「それでも，絆というものはある，絆があるのだよ」というものであった。しかしいまは，さらに深い心の底から，「神に」呼びかけるのである。それは，自己の義務を果たし，懸命に生きてきたイーリヤのための，神へのとりなしであった。すなわち，我々のせわしく過ぎていく人間生活の，混乱と堕落に満ちた道化芝居のあいだにも，イーリヤが自己の契約の条件を果たしてきたことを，サムラーは，神に証言するのである。「彼はたしかに自己の契約の条件を果たしました。心の奥底では，どの人も知っている条件を……というのは，それこそが，人間生活の真実なのですから」。(“he did meet the terms of his contrast. The terms which, in his inmost heart, each man knows....For that is the truth of it”) (p.313) このあとで，「(その条件を) わたしたちは知っているのです」(“we know”) という言葉が，詠唱のように何度も繰り返される。これは，イーリヤが果たした人間の条件は，人間の語るまでもない「自然な」真実を指していることを表わしている。

こうして，ニューヨークにおけるサムラーの三日間の旅は終わる。彼を取り巻く人物たち，黒人スリ，フェファー，ブルッフ，アンジェラ，ウォレス，マーゴット，シューラ，ラル，アイゼン，そしてイーリヤを通して，現代人の諸相が構成されている。事件としては，サムラーによるスリの目撃，大学の講演会，ラルとの対話，アイゼンの暴力，そして イーリヤの死が物語られる。しかし，その背景には，ほぼ20世紀全体を生きてきたサムラーの，長い人生の時間と空間が潜在している。彼は，ポーランド系ユダヤ人で，1920年代と1930年代にはイギリスに住み国際都市の計画に参画し，第2次大戦では強制収容所でホロコーストに直面し，今は現代文明の中心ともいえるニューヨークに住んでいる。折りしも，それは，アポロ11号の宇宙計画が達成されるそのときであった。また，彼の読書と思索は，トインビーなどの文明論を初めとして，人類の歴史全体にわたるものである。

こうした綿密な設定を通して，ベローは，現代人の狂気と文明の頽廃について歴史的に考察し，さらに人間と文明の未来の姿を模索する。彼は，ルネッサンスが宗教と科学の調和を崩して宗教的精神を廃棄したこと，またロマン主義が個性と独創を強調するあまりミメシスの伝統を遺棄したことなどを，省察の中心に置いている。こうして無残にも崩落せしめられた人間性の調和の回復が，なによりも未来に望まれているものと考えるのである。

このような作品の主題は，主人公サムラーの体験を通して緻密に描き込まれている。彼は，

若い頃は国際都市の理想に燃えていたのだが，第２次大戦のホロコーストで，肉体的にも精神的にも，死を体験した。そのあとは，犯罪と暴力の都市ニューヨークで，30年間の死の眠りのなかをさ迷っていたのである。彼は，神を信じる気にもなれないでいた。この意味で，この作品は，サムラーの死と再生の物語でもある。大戦後も泥沼と化した中東戦争，民族の故郷イスラエルの危機と悲惨を体験し，最後に彼はエックハルトの宗教的精神にたどりつく。また前述したように，彼の甥のイーリヤの死が，大きな契機となる。とにもかくにも，彼が大戦後30年も生きながらえてこられたのは，この善良なイーリヤの好意のお陰であった。このイーリヤの死の印象的な場面において，さらに彼の宗教的精神は成就されている。こうした意味で，サムラーの魂の彷徨を描いたこの作品は，20世紀の歴史書であり，かつ未来を臨む予言書となっていると言えよう。

注

1） Daniel Fuchs, *Saul Bellow: vision and revision* (Durham, N.C.: Duke University Press, 1984), p.209.
2) Jane Howard, “Mr. Bellow Considers His Planet,” in Gloria L. Cronin and Ben Siegel (eds.), *Conversations with Saul Bellow* (Jackson: University Press of Mississippi, 1994), p.80.
3) Brigitte Scheer-Schäzler, *Saul Bellow* (New York: Frederick Ungar, 1972), p.128.
4) Chirantan Kulshrestha, “A Conversation with Saul Bellow,” in Gloria L. Cronin and Ben Siegel (eds.), *op. cit.*, pp.87-88.
5) Brigitte Scheer-Schäzler, *op. cit.*, p.123.
6) マイスター・エックハルト「魂の内にある火花について」『エックハルト説教集』田島照久編訳，岩波文庫，1990年，pp. 156-61.
7) M. Gilbert Porter, *Whence the Power? : The Artistry and Humanity of Saul Bellow* (Columbia, Mo.: University of Missouri Press, 1974), pp.160-61.
8) 以下ページ数は，Saul Bellow, *Mr. Sammler's Planet* (New York: Viking Compass Book, 1973)による.
9) Sarah Blacher Cohen, *Saul Bellow's Enigmatic Laughter* (Urbana: University of Illinois Press, 1974), p.176.
Daniel Fuchs, *op. cit.*, p.229.
10) Eusebio L. Rodrigues, *Quest for the Human: An Exploration of Saul Bellow's Fiction* (Lewisberg: Bucknell University Press, 1981), p.208.
11) Martha Duffy, “Interview with Saul Bellow,” Time, 9 Feb. 1970, p.82.
12) Jane Howard, *op. cit.*, p.83.
13) Sanford Pinsker, “Saul Bellow in the Classroom,” in Gloria L. Cronin and Ben Siegel (eds.), *op. cit.*, p.99.
14) Daniel Fuchs, *op. cit.*, p.331.
15) Sarah Blacher Cohen, *op. cit.*, p.183.
16) Daniel Fuchs, *op. cit.*, p.330.
17) Sarah Blacher Cohen, *op. cit.*, pp.186-87.
18) Daniel Fuchs, *op. cit.*, p.217.
19) Chirantan Kulshrestha, *op. cit.*, p.86.
20) アルチュール・ショーペンハウアー『ショーペンハウアー全集３　意志と表象としての世界　正編(Ⅱ)』斎藤忍随他訳，白水社，1973，pp.169-405.
21) マイスター・エックハルト「自分自身を脱ぎ捨てるということについて」前掲書，p.127.